

第4章

森のくらし



森ってなんだろうか

木々が生い茂る森。

森という人々の暮らしに与えられた

条件はどのように人々の生活に関係するのだろうか。

それは、あまりにも壮大な問いであり、

環境と人間と文化と変化といった多数の変数を

一挙に見据えなければならない難問である。

そうはいつでも、ふくしまの森とその恵みにより育てられた

生活や文化は確実に存在する。

しかしその姿は見る方角によって、視線の高さによって、

異なる姿を見せる。

そのいろいろな姿のいくつかを紹介してみよう。

森のくらしへ

福島県立博物館

館長 赤坂憲雄

第1章とともに県立博物館が担当するのがこの第4章「森のくらし」です。森ではどんなくらしが営まれていたのでしょうか。山の木を切り倒し材木として出荷するだけが仕事ではありません。ブナやトチの木は木地師たちの手により椀や盆などの食器に加工されました。シャクシやヘラといった汁や飯をよそう道具も作られていました。樹木の皮を利用して箕をつくるということも会津では普通でした。山菜や茸などの山の幸も森がもたらしてくれるものです。ゼンマイは保存できるように加工して出荷しましたし、その綿は弾力があるので手毬の芯に使いました。動物を狩ることも森や山での仕事でしたし、山を焼いて作物を植えることも行われていたのです。くらしは時代と場所によりいろんな展開をしていました。その一部をご紹介します。

ところで、くらしには楽しみもあります。奥深い会津では芝居が盛んでした。今でこそ檜枝岐村にひっそりと残されているだけになってしまいましたが、かつては奥会津各地に芝居の舞台があり芝居の一座があり、公演が行なわれていたのです。こうした楽しみが可能であったことの経済的な理由のひとつが麻の栽培がもたらした富だったとおもわれます。その時代は山深い地とはいえ、江戸や京大阪とつながっていた場所でもあったのです。

森でのくらしと楽しみ、その両方を見ていただければ、森というものへの見方もまた新たになるでしょう。

森に生きること



ヤマサキノゴヘイ
只見町教育委員会蔵



馬の版木
只見町教育委員会蔵



鉄砲巻物 只見町教育委員会蔵



ケモノトリ
奥会津博物館蔵



オリッカ



火伏せ
只見町教育委員会蔵

木々に囲まれ、生育する木々を利用して営まれる生活をこれから見ることにする。たとえば、樹木を利用するといっても、それは時代により変化する。当然のことながら現在とはかつてと同じではない。その過去もずっと変化の連続だったはずだ。「麻」という産業を失ったときにどう対応したか。全国を覆った「養蚕」だっていまは見る影もない。そう、サワグルミで箕を作るひとはいるかもしれないが、もう蚕座は作らないだろう。

上棟式に木材を削って特徴的な意匠を造り棟木

に下げるといことは木の霊を新築に際して祀ることだ、と解釈できないわけではない。しかも、この習俗が衰退だけしているかというところでもない。一方山に入り、樹木を切り倒すときに作法はどうなのだろうか。狩猟の際の儀礼はどうなっているのだろうか。

そうして、どのような楽しみにより人は生きるのだろうか。

複雑な「森に生きる」ということのほんの一面をながめてみよう。

木を加工する



マエッピキ：製材用の鋸



木地碗の底 固定したあとがみえる

カンナ棒のあとがきれいな木地碗

樹木をどのように利用するかによって、いろいろな仕事が生まれてくる。

まず、最初に木を切り倒し、木材へと加工するのが元山もとやまといわれる人たちである。もちろん、機械化されていないのだから、使用する道具は斧おのと鋸のこぎりだ。この先は木挽こびきの出番になる。マエッピキという大きな鋸を使って板材を作り出すのだ。

以前にビデオを撮影した時に「主役」になっていた元木挽きの人に話を聞いたことがある。どうしてこの職業を選んだのかというと、単純に、景気がよく、金になったからだったという。



スリガタ 奥会津博物館蔵
この曲線にガイドを押し付けていけば、そのとおりに碗や皿が削れる



カンナ棒：回転する木材に押し当てて削る



というのも、父親が体が丈夫ではなく、そのため一家の家計を助けるために働きに出たので、そのときにどの職がよいかという判断をして、その結果が木挽きだった。山中に小屋掛けをして作業をしたのだという。この人にはいろんなことを教えてもらった。格言みたいな決め台詞のような、なかなか印象に深く残るようなことをよく話す人だった。木の切り方でも、日のあたる方とそうでないところとでアテとミカタという二つの方向があり、木を切り倒すときはどのように鋸を入れるのかということも説明してくれた。



コバ屋根の一部 奥会津博物館蔵



コバの削り台 奥会津博物館蔵
下の写真のように使う

コバ削りの作業
奥会津博物館南郷館蔵

コバを割る
奥会津博物館南郷館蔵



こうした、本格的な用材を作り出す職がある一方、もっと別な仕事もある。

たとえば、町中の家などでも、屋根を瓦で葺くふというのはなかなかできなかった。だから、コバという、木の板を使っていたのだ。風の強い海岸沿いの集落では飛ばないように石を載せ石屋根にしていた。逆に会津などでは石屋根は少なかったかもしれないが、どちらにしても抑える工夫がないと風に飛ばされてしまう。

また、同じように木を削る仕事でも、もっともっと薄くすればそれは付け木になる。薄く削った木の端に硫黄を溶かしてつけた付け木は、火を

移すのに役立った。

木地師といえ山中でお椀や皿、盆などの材料になる樹木を倒して、そこからまず粗く形をヨキや手斧で削っておいて、ロクロとよばれる手を使って回転させる旋盤で削って加工していた人々である。彼らは自分たちで田を耕すわけではなく、むしろ木材を加工し、その先の工程を受け持つ塗りをする人々に渡すことにより収入を得ていた。主要な作物の耕作を行わないと聞くと、貧しい生活を想像しがちだが、実際は手に入れた現金の力により、米でも味噌でも酒でも手に入れることができる、かえって裕福な人だったという。



左 シャモジ
右 焼印「宮島」



焼印「古峯山」



焼印「天狗」



焼印「塩原温泉」



焼印「湯ノ花温泉」

同じ木材から作りだすといっても、汁をすくう杓子しゃくし。この場合は汁をすくう部分を彫るという作業がある。ヘラ、つまりシャモジとなると平坦な板を型で抜くだけでほとんど完成してしまうということになる。

旧伊南村のある家の倉庫からは大量のシャモジが出てきた。それと一緒に焼き印も保管されていた。「宮島」といえば、広島県の宮島のことだろう。シャモジは特産品だ。それから、「古峯山」というものもあった。栃木県の鹿沼市の神社で広い信仰圏を誇っている。会津若松やその他の町中には

古峯神社のお札を納める石柱が町ごとに立っている。火災を防ぐためである。天狗の顔の焼き印はおそらくこの古峯神社のものなのだろう。それから、旧館岩村の湯の花温泉のものもあった。ようするに、これらは観光地のお土産品か、神社などの縁起物としての製品であり、受注生産だったのだろう。宮島といえはるか西国。通常ならばこのような取引にはならないだろうが、実際にはこうした受注関係があったのだ。

山の中に生活を支える方法は刻々と、あるいは急激に変化するものらしい。



大竹式炭窯の断面模型



付木削り
奥会津博物館南郷館蔵

会津の山中からは遠く離れた相馬で山林のことを聞いていた。話は昭和38年に嫁入りした奥さんの昔をふりかえる感想である。自分が嫁にくるまでは山は景気が良く、薪を求める人に売ること十分潤っていた。海岸近くに居住して、燃料となる薪を生産できる山を持たない人たちは買うしかなかった。売りものとしての山が機能していた。一山の木を売れば嫁に出す用意などは十分できたという時代だった。富を生み出してきた山は数代前の先祖が買い求めたものだった。先見の明が30年代までの豊かさをもたらしたのだった。ところ

が30年代というのは燃料が変化する時代でもある。薪の需要は衰え、何に生活を求めるかということになり、養蚕そして、椎茸栽培と続いた。いまでは山を持つことはすでにつらいことになっていた。投下する費用を回収することなど期待できない状況になってしまっていた。

木の力 一本造の仏像



木造十一面観音立像（明光寺）

会津若松市御山の明光寺は徳一が開いたと伝えられている。この仏像は頭から腕なども含めて一本の木から彫りだされている。鑿のあとが残されているが、荒々しさの表現というよりは木の質感を表現しているものと思われ、全体的に穏やかな姿になっている。像高188.2cm。12世紀。

一木造とは割刳造や寄木造とともに木彫の技法をいう。福島県内の仏像を最もよく調査し研究している若林繁氏によると、「頭部から体躯へと、像の中心となる部分を一本の木から彫り出していく技法である。両腕や脚部など、像の中心部から大きく出た部分に別の材を寄せても、頭体の像の中心部が一材で彫り出されていれば一木造の像という。平安時代前期はこの技法が中心的だったが「しかし福島では平安時代前、後期のみならず、

この地で作られた仏像には、室町、江戸時代までも一木造の技法が息づいているのである。頭体を一材から彫り出すのであるから、最低でも像の根幹部の大きさの材が必要であり、一帯の仏像を造立するのにかなりの大木が得られなければならない。」のだという。一木造は重量があり、中心の木心に向かって干割という乾燥によるひびが入るので、それを防ぐために木心を削り抜いておくこともするという。（若林 pp.57～8）

木造金剛力士立像（大蔵寺）

大蔵寺は阿武隈川近くから立ちあがる福島市の小倉寺山中腹にある寺院で、平安時代の仏像28体が伝えられている。28体の仏像すべてが一木造であり、千手観音以外は素地のままである。材質はケヤキやかつらが多く、破損しているものも多い。金剛力士立像は像高132.5cmの内割のない一木造である。両肩には孔がうたれており、ここにかつては腕が付けられていたことが分かる。



また地方物においては、仏像の表面が木肌そのままの素地仕上が主流であることの説明として以下のことを若林が述べている。福島市の大蔵寺の縁起に「当寺の仏像をつくるときに毎夜光を放っていた霊木を山中にみつけ、それをもって仏像を彫刻した」ということから「仏像を刻んだ木は、神霊の宿っている霊木であった。木そのものがその地の神であり、その木に仏像を彫ったのである。ここには在地の神と仏像との合一がみられるだろ

う。神霊の宿っている木であるからこそ、木の本质を失ってはならなかったのである。そこで木の肌を生かした、素地仕上げの像が在地の造像では基本となったものと考えられるのである。」とする。（若林 pp.55～6）

このような若林氏の記述からは、まさに一木造り素地仕上の仏像こそは樹木に宿る神霊の力を示すものでもあったことが予想される。すなわち、これらの仏像たちは木霊、木の霊であった。

ゼンマイ綿のワンピース ゼンマイ綿をめぐるエピソード

ゼンマイ綿のワンピース
ゼンマイ綿を木綿綿と混ぜて
紡いだ布を仕立てたもの。



ゼンマイの混ざった布の拡大写真



ゼンマイの綿

ゼンマイと織物といえば、秋田県由利本荘でかつて白鳥の羽と紡いだ糸を使った、ゼンマイ白鳥織りというものがあったという話を思い起こしてしまう。ところがゼンマイ綿を使ったワンピースが会津若松にあるという話を聞いたときは、きっと南会津出身で、そこでは秋田と同じようにゼンマイ綿を使って布を織ることが残っていたのだと思われた。しかし話はそう単純ではなかつ

た。なによりも、いま聞くことができるところからは、せいぜい手毬に使って、その弾力を利用するというくらいだったからだ。

戦後、伊南にあった分校の教師として赴任した夫について暮らした女性は、子どもの世話も大変なので、夫の母親を呼び寄せて一緒に暮らした。この方は岩手県の衣川の出身で、ゼンマイの綿を集めて若松に送って、木綿の綿と一緒に紡いでみたのだという。もしかしたら、岩手での知識が生かされて会津のゼンマイ綿とつながってこのワンピースができたのかもしれないと思った。



ゼンマイ綿
只見町教育委員会蔵



ゼンマイの綿の心
只見町教育委員会蔵



只見の手毬 只見町教育委員会蔵

カラムシのワンピース
昭和村教育委員会蔵



しかし、かつてゼンマイ綿を使った織物があったという話を旧伊南村の村史編纂に携わっていた方がしていた。今はもう亡くなられてしまったので、確かめようもないのだが、実際のところどうだったのだろうか。

そんななか、伊南村史の資料編に貴重な記録があったということを知った。

つまり、この時期にはすでに地域でゼンマイ綿を利用するようなことは手毬などを除けばなにもなく、むしろ、それが売れるというのなら売りたいということが読み取れないだろうか。

ゼンマイ綿収集の達し 昭和十一年五月

伊南村組合農会長

星 和雄

各幹事殿

紫薇綿販売斡旋ノ件

今回特許紡績株式会社ニ於テ紫薇製造ノ際生ズル綿ヲ利用シテ特殊織物ヲ製造スベク其ノ材料蒐集ノ為生産地出張購買ノ実施計画有之旨本会ニ対シ本県副業協会長(本県経済部長)ヨリ通知有之候処右八山村ノ遭利開発上効果尠ナカラザルモノト認めラレ候条左記御了知ノ上可燃之ガ蒐集相成様御配慮相煩度此段及通知候也

追而蒐集予定数量報告ノ都合モ有之候条折返シ御回報相成土添候

記

一、購買地及期日

郡内一ヶ所又ハ数ヶ所ニ於テ実施予定ノ趣ニ付本会宛御送付相成度期日ハ可成早キヲ可トスルモ期限ハ追而通知ス

二、蒐集后充分乾燥セシメ棒ニテ打綿シ塵埃ヲ取除キタルモノタルコト

三、価格八品質塵芥ノ混入歩合等ニ依リ相違アルベキモ一貫匁当り購買地ニ於テ七拾銭位トス

(「伊南村史 第4巻 資料編3」p.717)

樹皮の箕とフジと竹の箕 山の恵みのカタチを考える



ケヤキ箕 奥会津博物館蔵



ジョウゴ箕 奥会津博物館蔵



皮箕の裏側

サワグルミの皮箕
奥会津博物館蔵

ふくしまの箕

箕はなによりもまず選別の用具である。この道具を使うことで穀物などの収穫物の中に混じているゴミなどを軽さの違いなどを利用して巧みにえり分けることができる。

ふくしま県内の箕は特徴的な分布をしている。広く分布する竹箕とかシノ箕と呼ばれるフジツルからとった丈夫な繊維と竹や篠竹を使って編み上げる箕。これはある意味で熟練の職人仕事になる。フジは山林に分け入り採集する。

一方、南会津などでは一般的に皮箕と呼ばれる

箕が使われてきた。サワグルミという名のとおり水辺に生えるクルミの木の皮をはいで折り返して作るもので、まれにケヤキの樹皮も使われる。サワグルミの樹皮はかつては蚕を飼育する蚕座としても利用される。

いずれも、栽培されたものではなく、山野に素材を求める採集により得た素材ということは、山からの恵みによってできあがっているという点では同じだろう。

また、片や竹とフジツルをゴザ編みにしたもの、他方は一枚の樹皮を折り曲げたものと、まっ



二本松市太田地区のシノ箕



シノ箕の折り返し部分



折り返しの部分



只見の竹箕
只見町教育委員会蔵

たく異なる材質からできているが、その構造は共通している。チリトリ型とも言われるように片方に開いた形をしているが、どちらも閉じたところは素材を折り返して縫い上げてある。

こうした明確な分布を示しているなか、南会津の只見は興味深い。皮箕の分布の中に竹箕が存在しているのだ。それは実は峠を越えた新潟との交流の影響らしい。新潟からこの技術がもたらされ、受け継ぐ人が存在したのだ。素材を与えてくれる自然環境が樹皮を利用する皮箕の存在を支え

ていると考えるならば、只見の箕はそこに情報の流入により文化の影響があるという例としてみることもできるだろう。

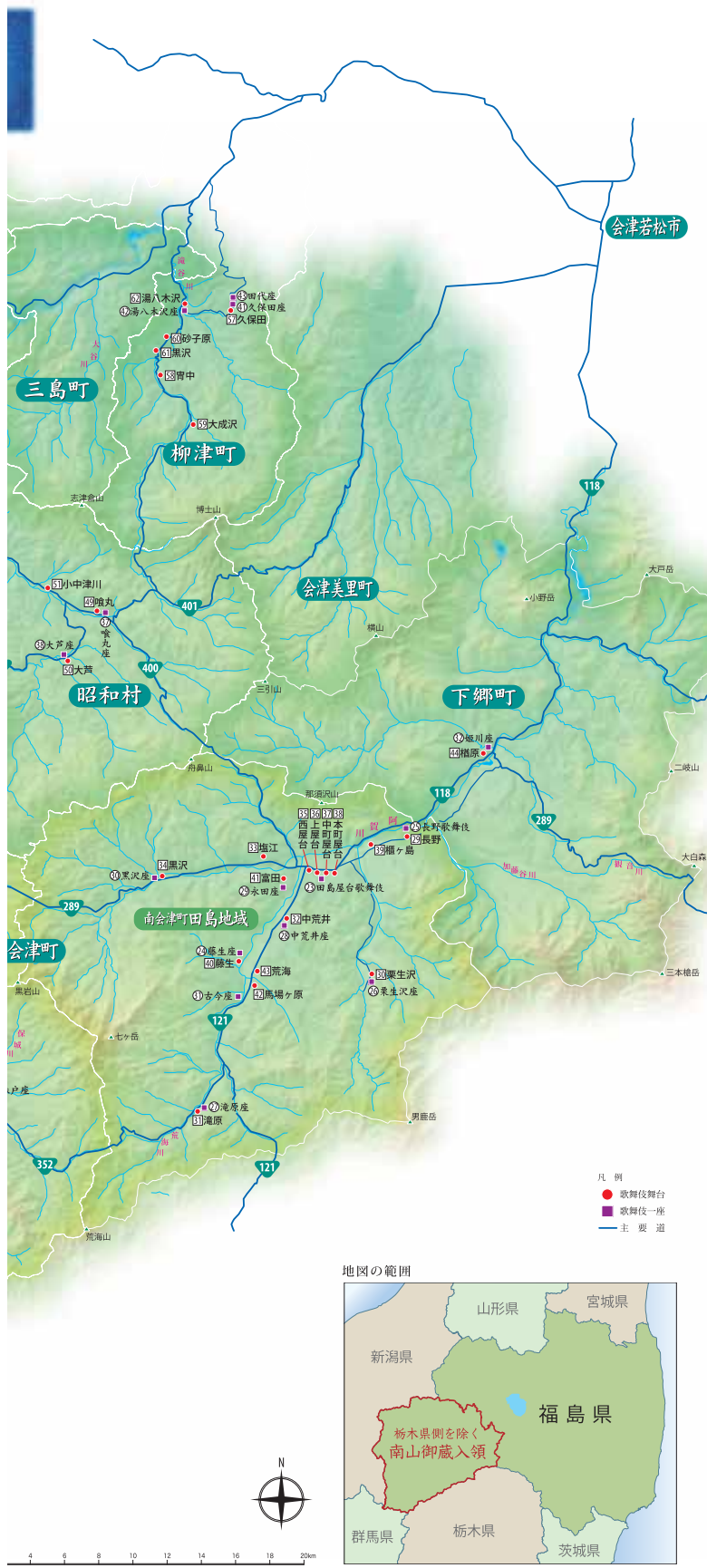
山の中の歌舞伎芝居

奥会津歌舞伎舞台および一座分布図

奥会津農村歌舞伎一座一覧

町	座名	所在地	活動期間	主な演目等	
奥会津町伊南地区	1 千葉之家花駒座	神枝味村	江戸後期から現在	「奥州安達原」「鎌倉三代記」「一の谷朝雲記」「絵本太閤記」「義経千本桜」等	
	2 大桃座	南会津町伊南地区大桃	明治期で廃絶	不明	
	3 古町座	南会津町伊南地区古町	不明	不明	
	4 茅ヶ風座	南会津町伊南地区茅ヶ風	明治10年頃まで	私塾塾長甲野家(屋号:かわやまこ)で衣装等を近隣の一座に貸していた	
	5 宮沢座	南会津町伊南地区宮沢	不明	不明	
	6 青柳座	南会津町伊南地区青柳	江戸末期から昭和20年代まで	「伝名手本忠臣蔵」「奥州安達原」等、衣装は伊勢屋高島のかねやまこから借りた	
	7 大川座	南会津町伊南地区大川	昭和14年頃南会津地方農協に譲渡	「一の谷朝雲記」	
	8 山口座	南会津町南郷地区山口	明治10年代から昭和20年代まで	「三善屋」「熊谷陣屋」衣装は田島から借りた	
	9 大宮座	南会津町南郷地区大宮	大正6年から昭和2年まで	大宮屋を株式会社として設立地芝居や興行活動を行った	
	10 鶴葉座	南会津町南郷地区鶴葉	不明	大新田(鶴井家)近隣の一座に衣装を貸していた	
	11 片貝座	南会津町南郷地区片貝	昭和22年から昭和34年まで	片貝集落(中丸家)近隣の一座に衣装を貸していた	
	12 下山座	南会津町南郷地区下山	明治時代から昭和20年代	明治34年ごろが最盛期	
	13 大橋座	南会津町南郷地区大橋	大正期	不明	
	14 富田座	南会津町南郷地区富田	不明	不明	
	奥会津町南郷地区	15 福市座	南会津町南郷地区福市	昭和20年代	「一の谷朝雲記」「三善屋」「絵本太閤記」等、衣装は伊勢屋高島のかねやまこから借りた
16 福渡座		南会津町南郷地区福渡	昭和20年代	「一の谷朝雲記」	
17 強ノ原座		南会津町南郷地区強ノ原	昭和30年代	「奥州安達原」「鎌倉千本桜」等、衣装は伊勢屋高島のかねやまこから借りた	
18 森戸座		南会津町南郷地区森戸	不明	不明	
19 湯ノ花座		南会津町南郷地区湯ノ花	不明	不明	
20 木賊座		南会津町南郷地区木賊	明治初期まで	不明	
21 水引座		南会津町南郷地区水引	不明	不明	
22 雙斗座		南会津町南郷地区雙斗	不明	不明	
23 田島屋台歌舞伎		南会津町田島	江戸時代から現在	「一の谷朝雲記」「熊谷陣屋」「南山義経の陣」「絵本太閤記」	
24 藤生座		南会津町田島地区藤生	大正期	「一の谷朝雲記」「鎌倉三代記」「絵本太閤記」「伝名手本忠臣蔵」	
奥会津町田島地区	25 長野歌舞伎	南会津町田島地区長野	江戸時代から大正期	「三善屋」「伝名手本忠臣蔵」「奥州安達原」等、二段目「奥州代官」	
	26 栗生座	南会津町田島地区栗生	明治中期頃まで	不明	
	27 滝原座	南会津町田島地区滝原	明治期まで	不明	
	28 中荒井座	南会津町田島地区中荒井	不明	不明	
	29 永田座	南会津町田島地区永田	明治末期七つとも盛ん	「三善屋」「一の谷朝雲記」「奥州安達原」	
	30 黒沢座	南会津町田島地区黒沢	昭和25年頃まで	不明	
	31 古今座	南会津町田島地区古今	昭和20年代	不明	
	32 姫川座	南会津町下郷	不明	不明	
	只見町	33 朝日座	南会津町只見町朝日	活動開始時期は不明、昭和30年代まで活動	「南山朝日石碓」「奥州安達原」「阿波門」「義経千本桜」等
		34 小川座	南会津町只見町小川	不明	演目は不明
35 福井座		南会津町只見町福井	不明	演目は不明	
36 布沢座		南会津町只見町布沢	明治期から昭和13年頃	不明	
昭和村	37 喰丸座	大沼郡昭和村喰丸	不明	不明	
	38 大芦座	大沼郡昭和村大芦	不明	不明	
金山町	39 山入座	大沼郡金山町山入	昭和20年代に遼東及平成2年に再興	「一の谷朝雲記」「熊谷陣屋の段」等	
	40 中川座	大沼郡金山町中川	昭和初期まで	中川集落(長谷川)近隣の一座に衣装等をかしていた	
柳津町	41 久保田座	河津郡柳津町久保田	大正期	「寛政伝授手帳」「鶴屋(めいぼく)千代萩」	
	42 湯八木座	河津郡柳津町湯八木	不明	「忠臣蔵」「熊谷陣屋」	
	43 田代座	河津郡柳津町田代	不明	「政談」	





奥会津歌舞伎舞台一覧

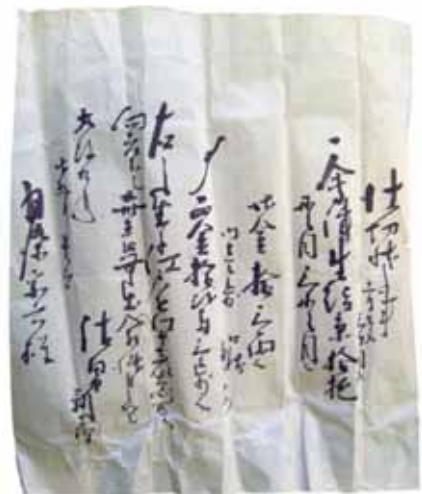
町村	舞台名	舞台形式	所在地	現状等	建設年代	
南会津町伊南地区	1 檜枝岐	常設	檜枝岐行願寺神社境内	国重要有形民俗文化財	明治33年	
	2 大桃	常設	南会津町伊南地区大桃鶴ヶ嶽神社境内	国重要有形民俗文化財	明治28年	
	3 大原	常設	南会津町伊南地区大原二丁目神社境内	昭和25年解体	嘉永3年	
	4 宮沢	常設	南会津町伊南地区宮沢香取神社境内	昭和42年7月解体	江戸末期	
	5 耻風	常設	南会津町伊南地区耻風寛政神社境内	昭和50年解体	明治22年	
	6 古町	組み立て式	南会津町伊南地区古町	現存	明治43年	
	7 青柳	組み立て式	南会津町伊南地区青柳	現存	明治12年	
	8 白沢	組み立て式	南会津町伊南地区白沢	—	不明	
	9 小塩	組み立て式	南会津町伊南地区小塩諏訪神社	—	不明	
	10 内川	常設	南会津町伊南地区内川菅原神社	昭和15~16年損壊	不明	
南会津町南郷地区	11 山口	組み立て式	南会津町南郷地区熊野神社境内	—	不明	
	12 大宮	常設	南会津町南郷地区山口	昭和3年解体	大正6年	
	13 鴉巢	組み立て式	南会津町南郷地区鴉巢	昭和47年損壊	不明	
	14 宮床	組み立て式	南会津町南郷地区宮床稲荷神社境内	—	不明	
	15 片貝	組み立て式	南会津町南郷地区片貝	昭和52年損壊	江戸末期	
	16 蛇の宮	組み立て式	南会津町南郷地区蛇の宮稲荷神社境内	—	不明	
	17 下山	組み立て式	南会津町南郷地区下山	平成6年損壊	江戸末期	
	18 泉田	組み立て式	南会津町南郷地区泉田	—	不明	
	19 大橋	組み立て式	南会津町南郷地区大橋	昭和41年に大橋の増築の上で解体して使用	不明	
	20 木伏	組み立て式	南会津町南郷地区木伏	昭和11年解体	不明	
南会津町麓岩地区	21 湯ノ花	常設	南会津町麓岩地区湯ノ花二荒山神社境内	南会津町指定文化財	明治22年	
	22 塩ノ原	常設	南会津町麓岩地区塩ノ原神社境内	昭和40年損壊	文久3年	
	23 松戸原	常設	南会津町麓岩地区松戸原	—	旧来の舞台台昭和22年移設	
	24 巽斗戸	常設	南会津町麓岩地区巽斗戸稲荷神社境内	昭和20年解体	不明	
	25 森戸	常設	南会津町麓岩地区森戸	昭和20年解体	不明	
	26 木賊	拝殿兼用	南会津町麓岩地区木賊堂山神社	現存	昭和15年~6年	
	27 貝原	常設	南会津町麓岩地区貝原土神社境内	昭和22年解体	明治28年	
	28 水引	常設	南会津町麓岩地区水引大山神社境内	昭和30年損壊	不明	
	29 長野	常設	南会津町麓岩地区春日社境内	—	文政9年	
	30 粟生沢	拝殿兼用	南会津町田島地区粟生沢大山神社	現存	不明	
南会津町田島地区	31 滝原	拝殿兼用	南会津町田島地区滝原神社	現存	不明	
	32 中荒井	地蔵堂兼用	南会津町田島地区中荒井地蔵堂	現存	享保12年~13年	
	33 塩江	拝殿兼用	南会津町田島地区塩江神社	現存	不明	
	34 黒沢	地蔵堂兼用	南会津町田島地区黒沢地蔵堂	昭和33年6月解体	明治24年6月	
	35 西屋台	山荘	南会津町田島地区西町	現存	天保7年	
	36 上屋台	山荘	南会津町田島地区上町	現存	不明	
	37 中町屋台	山荘	南会津町田島地区中町	現存	不明	
	38 本町屋台	山荘	南会津町田島地区本町	現存	不明	
	39 櫃ヶ島	常設	南会津町田島地区櫃ヶ島神社	明治末期解体	不明	
	40 藤生	細木等で組み立て	南会津町田島地区藤生三輪神社境内	—	不明	
下郷町	41 富田	「行屋」兼用	南会津町田島地区富田稲荷神社境内	現存	不明	
	42 馬場ヶ原	常設	南会津町田島地区馬場ヶ原二荒山神社境内	昭和13年~33年頃まで	昭和13年頃	
	43 荒海	常設	南会津町田島地区荒海	—	昭和20年代	
	44 楢原	常設	南会津町下郷町楢原	—	不明	
	只見町	45 布沢	拝殿兼用	只見町布沢八幡神社	現存	不明
		46 黒谷	組み立て式	南会津町只見町黒谷神社境内	—	不明
		47 石伏	組み立て式	南会津町只見町石伏	—	不明
	昭和村	48 中向	常設	大沼郡昭和村野中町春日社境内	昭和41年解体	明治27年
		49 陰丸	拝殿兼用	大沼郡昭和村陰丸能登神社境内	現存	不明
		50 大芦	拝殿兼用	大沼郡昭和村大芦大山神社境内	昭和20年に焼失しすくりに再建	不明
51 小中津川		常設	大沼郡昭和村小中津川辰多神社境内	現存	不明	
52 野尻		常設	大沼郡昭和村野尻	昭和44年以前に取り壊し	不明	
金山町	53 玉梨	常設	大沼郡金山町玉梨能登神社境内	現存	不明	
	54 鮭立	組み立て式	大沼郡金山町鮭立伊賀能登神社境内	—	不明	
	55 新遠路	組み立て式	大沼郡金山町新遠路大山神社境内	—	不明	
柳津町	56 横田	組み立て式	大沼郡金山町横田伊賀神社境内	—	不明	
	57 久保田	拝殿兼用	河沼郡柳津町久保田伊賀神社	—	不明	
	58 青中	細木等で組み立て	河沼郡柳津町青中	—	不明	
	59 大成沢	細木等で組み立て	河沼郡柳津町大成沢	—	不明	
	60 砂子原	細木等で組み立て	河沼郡柳津町砂子原	—	不明	
	61 黒沢	細木等で組み立て	河沼郡柳津町黒沢	—	不明	
	62 湯八木沢	常設	河沼郡柳津町湯八木沢	—	不明	

*「現状等」欄「—」印は、現存していないもの
*「行屋」(ぎょうや)とは白湯山ササの温泉所 (No.41 富田)

「奥会津歌舞伎舞台および一座分布図」は奥会津博物館が作成したものです。



南会津町耻風の歌舞伎衣裳
奥会津博物館蔵



仕切り伏 伊南村史編纂室



歌舞伎のあるところ

芝居・歌舞伎とくるとどうしても檜枝岐村ということになる。舞台が残り、定期的な上演もおこなわれ、それを見るために大勢の人が集まる有名な行事である。しかし、檜枝岐の隣の旧伊南村の大桃地区にも国が有形民俗文化財として指定する舞台がある。場所は駒ヶ嶽神社の境内である。同じ旧伊南村にはほかに宮沢地区と耻風地区にそれぞれ舞台が残されている。旧伊南村の中心地であ

る古町地区には組み立て式の舞台が残されている。南会津町の奥会津博物館が調査した結果では、奥会津には62の舞台と、43の歌舞伎一座があったのである。現在も続いている檜枝岐の芝居は、この膨大な奥会津を中心とした芝居の文化のほんの一部が表出して私たちの目に触れているにすぎないのである。そして、すでに国指定になっている田島の祇園祭には屋台の上で芝居が上演されることはよく知られている。この芝居もこの大きな芝居文化圏の輪の鎖のひとつであることが理



仕切り伏の印「大坂北浜二丁目 佐新」



芝居道具の制札



南会津町耻風の歌舞伎衣裳
奥会津博物館蔵



解できる。

こうした芝居の熱が広まることのできた大きな理由は、この地方が幕府の直轄地で会津藩預かりなど、支配が藩の直接ではなく、それだけ自由度が高かったことが挙げられる。芝居は生産的ではなく消費的だとして禁止されたり抑制されたりする。

もうひとつ理由をあげるとすれば、この地域の経済と交通のことも考慮に入れておいた方がよいかもしれない。かつて、奥会津と呼ばれる地域は

麻取引でにぎわった。買い付けには遠く上方の商人もやってきた。その結果、富を手に入れる人々が出現する。江戸や上方の商人にとってこの地は決して辺境ではなかったろう。今でも聞くことのできる話として、南会津町大桃（旧伊南村）の堰まで遡上してきた鱒を捕らえて、籠で背負って今市まで運んで売ったということがある。道は意外と開け、近かったのである。

楽しむことはどこにいても人々の心を捉えて放さない。

協力者一覧 順不同 敬称略

- 個人 新国 勇 渡部 賢史 星 洋一 渡部 陣一 渡部 康人 吉津 瑞穂
 平田 尚子 山次 千代 戸田 房枝 紀 治男 武藤叡太郎 星 寛
 吉田 昌康 岩崎 真幸 河原田宗興 若林 繁 政次 浩 加藤 幸治
 森本 仙介 湯川 洋司
- 団体 奥会津博物館 奥会津博物館南郷館 奥会津博物館伊南館 南会津教育委員会
 南会津町南郷総合支所教育委員会南郷分室 南会津町伊南総合支所村史編纂室
 只見町教育委員会 からむし工芸博物館 昭和村 大蔵寺 明光寺 常光寺 雄国竹細工保存会
 目黒写真館 コンテンツ株式会社 エプソン販売株式会社宇都宮営業所 東北歴史博物館
 三春町歴史民俗資料館 南相馬市博物館

引用・参考文献

- 伊南村史編さん室 2005年『伊南村史 第6巻 民俗編』
 伊南村史編さん室 2007年『伊南村史 第4巻 資料編3』
 奥会津地方歴史民俗資料館編 2001年『木地語り - 会津田島のとびの足跡 - 』
 鈴木克彦 2008年「奥会津・箕の物語 2007」『福島県立博物館紀要』第22号
 田島町民具研究会 1980年『奥会津地方の山村生産用具 』
 只見町史編さん室 1992年『図説 会津只見の民具』
 南郷村教育委員会 1979年『南郷村の文化財6』
 福島県立博物館 1987年『会津の仏像』
 福島県立博物館 1989年『中通りの仏像』
 福島県立博物館(若林繁) 1997年『福島県の仏像 - 福島県仏像図説 - 』 福島県立博物館
 渡部陣一 2009年「奥会津に花ひらいた歌舞伎文化」『会津人群像』第14号 歴史春秋社

主な展示資料

国指定重要有形民俗文化財
 県指定重要文化財

	資料名	所蔵者		資料名	所蔵者
○	木造金剛力士立像	大蔵寺		皮箕	奥会津博物館
○	木造十一面観音立像	明光寺		オリッカワ	当館蔵
○	南郷の歌舞伎衣装	奥会津博物館南郷館		二本松の箕	当館蔵
	耻風の歌舞伎衣装	奥会津博物館		南相馬市の箕	当館蔵
	コバ作り資料	奥会津博物館南郷館		手毬	只見町教育委員会
○	付木削り資料	奥会津博物館南郷館		ゼンマイ綿	只見町教育委員会
	伐採運搬用具	只見町教育委員会		ゼンマイ綿のワンピース	当館蔵
	木地関係資料	奥会津博物館		カラムシワンピース	
	手挽きろくろ	当館蔵		緋麻着物	伊南村史編さん室
	狩猟関係資料	只見町教育委員会		麻仕切帳	伊南村史編さん室
	炭焼き模型	当館蔵		火伏せ	只見町教育委員会
	竹箕	只見町教育委員会			